



「AI」と遊んだら一緒だった

全鍍連 評議員 梅田 ひろ美
(株式会社ユニゾーン／富山県鍍金工業組合)

気持ちだけは若いつもりでも、ふとした瞬間に目や耳、歯や足の衰えが目立ってくる年代となりました。近頃は、つい夜更かしが過ぎて昼夜逆転の生活をしているのではないかな。テレビを友として過ごす時間がすっかり増えた生活。

テレビを眺めていると、かつて私が足繁く通った場所の光景が映し出されました。何十年前の記憶が、鮮明な色合いと共に昨日のここのように蘇ってくる——そんな不思議な感覚に包まれました。しかし、じっくりとその映像を見つめていると、ある違和感に気づきます。記憶の中にある街並みや建物は、確かにそこにあるのですが、何かが決定的に違うのです。時代と共にその光景は「当時」とは似て非なるものへと姿を変えていました。

私たちを取り巻く環境もまた、同じです。私がこのめっき業界に身を投じた数十年前、現場に漂っていた熱気や、当時の主力だった技術。それらは今、振り返ってみれば隔世の感がございます。かつて「当たり前」だった手法が、今では過去の遺物となっていることも少なくありません。テレビの中で見た景色が少しずつ塗り替えられていったように、私たちの業界もまた、時代の要求に合わせてその「表面」を常にアップデートし続けてまいりました。

しかし、景色が変わっても、その場所が持つ役割や人々の営みが続くように、私たちの仕事の本質は変わりません。めっきという技術は、素材に新たな命を吹き込み、保護し、

輝かせるものです。たとえ使う薬品や装置が進化しても、「より長く、より美しく、より機能的に」という、ものづくりに対する根本的な情熱は、数十年前のあの場所で私たちが抱いていたものと何ら変わりはありません。

テレビの中の景色が「当時とは違う」と感じたのは、単なるノスタルジーではなく、その場所が生き続け、変化し続けてきた証拠でもあります。同様に、今の私たちの工場が、当時のそれとは全く違う姿をしていたとしても、それは私たちが止まることなく歩みを進めてきたという矜持に他ならないのです。

私たちは今、再び大きな時代の転換点に立っております。数十年後、未来のリーダーたちが今の私たちの現場を振り返ったとき、「あの頃とは随分変わったな」と微笑むことでしょう。そのとき、景色は変わっていても、私たちが守り抜いた「技術・品質・実績・信頼」がしっかりと受け継がれていること。それこそが、今を生きる私たちの使命であると考えております。

テレビの光景から呼び起こされた記憶は、私に「変化を恐れず、本質を見失わない」ことの大切さを改めて教えてくれました。めっきという地味ながらも欠かせないこの技術が、次の数十年の景色をどう彩っていくのか。業界の皆様と共に、新しい時代の「輝き」を模索し続けていきたい、そう強く願っております。

近くのアーケードの散歩が楽しい私です。